

調査報告

九十九里町真亀の葬送儀礼

大木淳一・島立理子

千葉県立中央博物館

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2

はじめに

本報告は、千葉県山武郡九十九里町真亀において平成22年2月に執り行われた葬儀の次第を記録したものである。

真亀地区では今なお仮通夜などの習慣が残るなど、古くからの風習が残っている地域である。しかし最近では、葬儀を斎場で行うなど簡素化の傾向にあるが、今回は故人の希望により自宅で葬儀を執り行う事とした。この葬儀をはじめとした葬送儀礼に著者の大木が立ち会う機会を得たので、その様子を詳細に記したものである。

今回亡くなられたのは、九十九里町真亀のO家のK氏(女性、数え歳81歳)である。K氏は昭和5年3月31日に千葉県東金市大沼のK家に生まれた。東金高校家政科(現九十九里高等学校)卒業後、和裁の学校に通い、昭和26年に九十九里町真亀のO家のM氏と結婚し、真亀を生活の場とした。結婚後、O家が営む農業を精力的に行った。O家では稲作、ピーマン・キュウリ・トマト等の畑作を行っており、昔は養蚕、養豚、シイタケ栽培、グラジオラス・キク等の花卉栽培も行っていた。子ども2人(長女、次女)に恵まれ、晩年は2世帯4世代の10人家族(K氏、夫のM氏、長女、長女の夫、孫3人(長女・長男・次女)、孫(長女)の夫とその子2名)の家族とともに過ごした。

K氏が過ごした山武郡九十九里町は、南北約60キロに渡る九十九里浜の中央部に位置する。O家がある真亀は九十九里町で一番南の地域で、住居は東金市や大網白里町との境界付近に当たり、九十九里浜から3キロほど内陸に位置

している。

真亀をはじめとする九十九里町周辺の海岸では夏になると海水浴客で賑わうが、内陸へ一歩踏み入れると広大な水田地帯や畑作地帯が広がる。

【宗派】

O家は、九十九里町真亀の顕本法華宗浄泰寺の檀家である。九十九里町の作田川以南の地域は、いわゆる七里法華地帯であり、真亀地区も作田川以南に位置している。

【葬儀の呼び名】

真亀地区では葬儀のことをかつては「ボーコン」(ごくまれに「ジャンボン」と呼んでいた。最近は「葬式」と呼び、上記の呼び名は使わないとM氏は語った。「ボーコン」の由来はM氏によると分からないとのことだ。ただし、「ボーコン」は長寿で逝去した等、良い意味で用いられ、「ジャンボン」はあまりいい意味では使わなかったと述べている。

【葬儀の経過】

今回、臨終から納骨に至るまで、仮通夜、通夜、葬儀を執り行った。仮通夜まではO家が準備し、通夜と葬儀の準備は組が全て仕切る習慣である。以下、時間を追って葬儀の様子を記す。なお、葬儀全体の流れや組の動きなどは付録1に時系列的にまとめた。また、今回の葬儀においては、O家の親戚で同じ葬式などを行う「組」の一員でもある通称「店のおばちゃん」が大き

な役割をはたしている。

<臨終（平成22年2月5日金曜日）>

19時37分、東金市内の病院で多くの親族が見守る中、K氏は死を迎えた。

病院にて故人の身体を洗い、事前に病院から連絡を受けて持参した浴衣をまとわせ、自宅へ戻る準備を行った。浴衣のあわせ方は左前で、通常と逆の着せ方だった。

その間、自宅では故人が帰る前に、1)半紙を神棚、仏壇の前にそれぞれ1枚張りつけて目隠しをした(孫の夫)、2)菩提寺である浄泰寺へ出かけ、ゼニバコ(カネバコともいう)(写真1)を取りに行き、葬式に僧侶を呼ぶ順番を確保した(長女の長男と次女)、3)組長へ知らせに行った(長女と長女の夫)。組長へ知らせることで、組長が組の人達の家を回って連絡することになる。

上記1)～3)は故人の夫のM氏と、これから執り行う葬儀の食事関係の仕切りや昔ながらの葬儀のやり方はM氏だけでなく、店のおばちゃんによるところが多かった。

21時30分頃、自宅に故人が帰宅。布団に故人を寝かせ、掛布団の上にカミソリを置き、枕元に簡素な線香台を設け、故人を偲んだ。訃報を聞きつけた親族や近所の人たちが0時頃まで弔問に訪れた。

この夜は線香を絶やさないう、親族4人で線香守を行った。この時に仮通夜から葬儀に至るまでの食事の献立を親族で相談し、買い出しの算段を行った(表1)。

<仮通夜（平成22年2月6日土曜日）>

翌日は7時頃から近所の人達が弔問に訪れた。

8時頃、葬儀業者が訪れ、故人を棺に入れ、祭壇を設置した。

O家ではその後、買い出しを行い、残った人で葬儀に向けて家の清掃、翌日の通夜で手渡す

お車代などの包装を行った。

13時、僧侶が到着し、祭壇を前に簡単なお経を読み上げ、K氏の長女と長女の夫と葬式の打合せを行った。僧侶は生年月日、家族構成、経歴などを書くための質問票を渡し、後で持ってくるようにと指示した。これは、戒名を決めたり、葬儀のタンドクモン(嘆徳文)のための基礎資料となる。

17時、通夜と葬儀の段取りを決めるために、組の人々がO家に集まり話し合いをはじめた。(写真2)。故人の生前からの希望があるため、葬儀はできるだけ昔から伝わるやり方で行い、家から見送りたいとO家が願い出た。しかし、すでに昔ながらの葬儀の記憶が定かでない人たちに世代が代わったため、葬儀を簡素化できないかと躊躇する意見もでた。結局、本来ならば、故人の夫であるM氏がかかわることはないが、M氏の記憶を頼りに、M氏が組の人たちを手伝うという条件で、昔ながらの葬儀を行うこととなった。

18時から仮通夜が執り行われた。約25名の親族、近親者が普段着で集まり、隣人の女性がお経を読み、その後、参列者全員で題目を唱えた。

18時30分から組の男ドンに料理とお酒を別室にて振る舞った。この席にO家からは故人の長女の夫だけが参加した。故人の夫であるM氏は弔問客の対応を行った。女ドンは通夜、葬儀にだす料理の段取りを相談して、男ドンより先に帰宅し、明日からの葬儀の準備に備えた。

22時頃、食事会が終わり、男ドンは帰宅した。

この晩、線香を絶やさないうに親族、近親者2名が線香守をした。

<通夜（平成22年2月7日日曜日）>

8時前に組の女ドンが料理の差し入れを持ってきた(中華サラダ、ゴボウ煮、レンコン煮)。

8時～10時頃まで、K氏の長女と店のおばちゃんが、通夜の食事の下ごしらえを開始し、

表1 葬儀で出す食事の献立

仮通夜 (2月6日)		通夜 (2月7日)		葬儀 (2月8日)	
献立	状況	献立	状況	献立	状況
お新香 (白菜と古漬け)	調理済み	エビフライ (キャベツの千切りを敷く)	女ドンへ 調理依頼	赤飯 3 升 (半分はおにぎり)	女ドンへ 調理依頼
里芋煮	〇家調理	天ぷら (サツマイモ、ピーマン、 ニンジン、ハス他)	女ドンへ 調理依頼	天ぷら (サツマイモ、ピーマン、 ニンジン、ハス他)	女ドンへ 調理依頼
刺身	注文	ゴボウの土佐煮	女ドンへ 調理依頼	汁 (醤油味、具はネギ・豆腐)	女ドンへ 調理依頼
菓子類	買い出し	おにぎり 1 升分	女ドンへ 調理依頼	お新香 (白菜と古漬け)	調理済み
酒・ビール・お茶	葬儀分全て 買い出し	お新香 (白菜と古漬け)	調理済み	刺身	注文
		里芋煮	調理済み	唐揚げ 5 キロ	注文
		刺身	注文	太巻き寿司 (のり巻き 5 本、タマ ゴ巻き 10 本)	注文
		だし巻き卵、高野豆腐	注文		
		太巻き寿司 (のり巻き、タマゴ巻き)	注文		
		ポテトサラダ 1 キロ× 2 個	注文		



写真1：浄泰寺から受け取ったゼニバコ（またはカネバコ）。
写真2：組の各家の代表が集まって葬儀の段取りを話し合う。
写真3：通夜の会葬客に配った法菓子。
写真4：天蓋をつけたジャ（蛇）。
写真5：導師旗（葬儀前に僧侶が筆書きした導師旗と四菩薩をつける）。
写真6：辻切り。

他の家族は通夜に向けた大掃除を行った。

10時～12時頃まで、店のおばちゃんは通夜の読経の合間に渡すホケ（法菓子）と呼ばれる、お茶菓子の準備を開始した。小さなレジ袋にホケを2つ入れた。ホケは取り上げの孫（真亀では「ソトマゴ」という。詳細は後述）が届ける事になっているが、今回は2名のソトマゴとO家が近所の和菓子屋（かんじや）から取り寄せたもので、大福、すあま等の生菓子のことである（写真3）。

この時間帯にO家は通夜の会場を設営し、座敷に80名分の座布団や椅子を並べた。親戚も集まり始めた。

12時頃、会場の準備が整ったので親族は昼食をとる。

13時、男ドンが4名集まり、葬儀に必要な道具の製作を開始した。作業場はO家の倉庫である。作ったものは、1）天蓋をつけたジャ（蛇）：1体（写真4）、2）導師旗：1本（写真5）、3）辻切り：1本（写真6）、4）線香の束（3本1組）：約50組（納骨に参列する人数分）、5）コヨリ：約50本（納骨に参列する人数分）（写真7）、6）香炉：1個（写真8）である。これらを通夜の受付が始まる17時頃までにはほぼ完成したが、ジャのみ翌朝に仕上げることになった。ジャの製作手順の詳細は付録2に記した。

14時、香典返しの袋詰め作業をO家で行う。

15時、女ドンが献立に従って料理を始めた。これ以降、O家の人々は葬儀の準備から離れることになり、喪服に着替えた。

16時30分、男ドンは製作場所であるO家の倉庫にて、女ドンの給仕により食事をとった。給仕は女ドンの役目である（写真9）。

17時から弔問客が訪問し始める。受付係は男ドン2名と親族1名が担当した。

17時45分頃、通夜が始まる直前に僧侶1名が到着した。

17時55分頃、僧侶が身支度を整えた後に通夜が始まった。司会進行は組の男ドン1名が行

い、湯灌人は参列者に香炉を回す役目を担った。

18時10分、読経が1度終わったところで、女ドンがホケをそれぞれに配布した。

18時50分、2回目の読経の後、通夜が終了した。その後、通夜を執り行った部屋にて食事の準備が始まった。座布団や長テーブルの設置は親族で行い、料理は女ドンが台所から運んできた。この食事会に対する特別な言い方は無いようだ。

19時10分から故人の夫、M氏の挨拶の後に食事を開始した。男ドンは別部屋にて食事をした。この時からお酒を飲み始めた。女ドンは台所で食事をし、会葬者の食事が終わるのを待った。会葬者は順次帰るため、女ドンが適当なところで片付けを行い、22時には終了した。

23時に男ドンの食事が終わり帰宅した。

その後は、親族や近親者で食事をとりながら故人を偲んだ。その中で遅くまで酒を飲んでいた数名が線香守ることとなった。

<葬儀（平成22年2月8日月曜日）>

6時、O家の人たちは喪服に着替える。

7時、男ドン、女ドンが集合した。男ドンはジャの仕上げ、女ドンは料理に取りかかった。

7時35分、僧侶1名が訪れ、読経を始める。

8時15分、出棺。棺に蓋をする前に会葬者は、男ドンが持った花を受け取り故人へ捧げた。蓋に釘を打つが、最後に打ったのは湯灌人だった。棺は玄関を通らず、祭壇がある部屋の縁側から運び出た。運び出す際、家の中では家族や故人に近い親族以外の親しい人や親戚が持つ。外では男ドンが霊柩車まで運び、湯灌人は頭の方を持つ。その後、親族一同と湯灌人2名が火葬場へ向かった。

8時30分頃、火葬場に到着後、すぐに火葬を開始した。

10時15分、火葬が終了し、骨を骨箱へ納めた。

10時40分、親族一同、O家に帰宅。お清めは男ドン1名が手伝った。到着後、すぐ昼食を

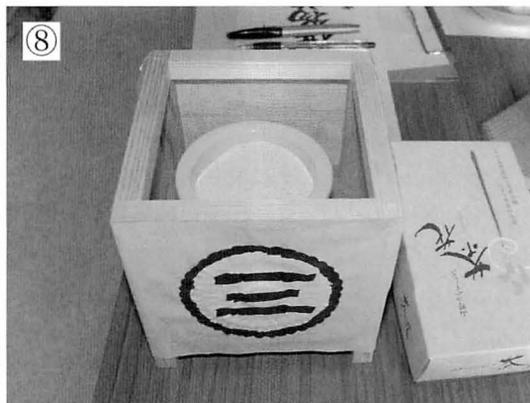


写真7：コヨリ（「妙一」と書かれた文字は葬儀前に僧侶が筆書きした）。

写真8：香炉（男ドンが色紙で装飾した）。

写真9：葬儀の道具を製作中に食事休憩をとる男ドン（給仕は女ドンの役目）。

写真10：女ドンの食事風景（立ちながら食べる女ドンもいる）。

写真11：六道まわり。

写真12：会葬列が墓地へ向かう曲がり角に辻切りの道具を持って待つ男ドン（右の男性）。

とった。故人に近い親族は別室のテーブルを使用した。

火葬場から戻った時に僧侶3名はすでに到着しており、卒塔婆、導師旗、四菩薩、辻切り、コヨリ、天蓋へ筆で文字を書き込んだ。作業終了後、親族とは異なる別部屋にて昼食をとる。

男ドンは僧侶が筆書きした導師旗、四菩薩を竹に、辻切りを竹に取り付けた後、倉庫で昼食をとった。女ドンは男ドンの食事の給仕をしつつ、台所でおのおのが食事をした（写真10）。

12時、受付開始。受付は男ドン2名で行う。葬儀が始まるまで、花輪や生花などが届き、O家の前の道にたくさんの花輪が飾られ、祭壇も華やかになった。

12時55分頃、僧侶3名による葬儀が始まった。終了後、初七日、百ヶ日、初月命日も同時に行われた。

式の司会進行は湯灌人以外の男ドン2名が行った。

読経前に湯灌人がコヨリを参列者に渡した。コヨリは墓地へ行くときに、胸のポケットにさしたり、手に持っていく。また、湯灌人は、墓地へ持って行くお膳を会葬者に回す世話をした（お膳まわし）。お膳には米を山盛りにして箸を立てたもの、鳥の唐揚げ、エビの天ぷら、マグロの赤身、お新香がのせてある。

また、読経中、故人の生まれ育った場所や生活の様子、経歴などを僧侶が紹介するタンクモンが読み上げられた。

14時頃、葬儀が終了した。

<埋葬（葬儀終了後）>

葬儀終了後、墓地へ向かい埋葬が行われた。

葬儀終了後、親族や会葬者は玄関から庭へ出た。この時、僧侶の指示により、六道まわりを行った。列の並び方は表2の通りである。

14時15分、僧侶も併せ、12名で六道まわりが始まる。男ドンが六道まわりの道具を持ち、それを中心に右回りに3回半歩いた（写真

11）。

その後、列はジャを持った男ドンを先頭に墓地へ向かった。六道まわりに参列しなかった親族、近親者などはこの列の後ろからついて行った。

家の門から出て、墓地までの道の曲がり角には「辻切り」を持った男ドンが立つ（写真12）。辻切りを持った男ドンは1名だけなので、会葬列が辻切りを通り過ぎると慌てて走り、次の曲がり角へ移動した（写真13）。O家から墓地への移動ルートを図1に示す。辻切りの道具を持った男ドンは5箇所立ったことになる。

湯灌人とジャや辻切りを持たない男ドンは墓地へ先回りして、列を待っている。

女ドンは埋葬には参加せず、食事の準備を行っていた。

14時25分、墓地に到着。男ドンがコヨリを回収し、納骨は湯灌人の1人が行った（写真14）。その後、僧侶が読経する中、会葬者は男ドンが作成した3本に束ねた線香を上げ、シオサンゴ（塩珊瑚米・後述）、一つまみ分の量を墓へパラパラとまいた。シオサンゴが入った紙をもつのは、納骨をしなかった湯灌人である。

会葬者が線香をあげている間に、ジャや辻切り、導師旗、コヨリ、骨箱をO家の墓地のすぐ横で男ドンが焼却した（写真15）。ただし、天蓋の土台が葬儀業者のものであるため、土台に張りつけた色紙や飾りだけをはがして焼却した。

14時45分、納骨の儀式が終わる。会葬者は行きと違う道を通り、O家へ戻った（図1）。

15時頃、O家に帰宅。男ドンが先回りして、お清めを手伝う。これで葬儀が終了し、会葬者は解散した。

15時5分、組や親族、24名で題目を3回唱えた（写真16）。

15時15分、題目講終了。その後、組へのお礼の食事会の準備を、女ドンと親族が中心となって行った。



- 写真 13：会葬列の次の曲がり角へ先回りするため、走って列を追い抜く男ドン（右の男性）。
写真 14：納骨する湯灌人。
写真 15：葬式の道具を焼却する男ドン。
写真 16：題目を唱える親族、近親者、組の人達。
写真 17：組の人達へのお礼の会。
写真 18：故人が着ていた服や毛布を洗濯して北向きに干す。

15時40分、故人の夫のM氏と長女の夫の挨拶の後、組へのお礼の会が始まった(写真17)。祭壇前に男ドン、女ドンが座り、故人の夫と長女夫婦が対応した。この間、親戚は別室にてお茶などを飲んでくつろいでいた。

17時頃、食事会が終了し、帰宅した。この際、組へのお礼として1キロの砂糖袋が4つ入ったものを渡した。

17時15分、親族が祭壇前のテーブルで食事会が始まり、遅くまで酒を飲んだ。

<葬儀翌日(平成22年2月9日火曜日)>

10時15分、故人が使用した毛布と服を洗濯し濡れた状態で北向きの場所に乾くまで干した(写真18)。店のおばちゃんの指示で孫の長女が行った。

10時45分、O家と近隣の親戚、湯灌人で墓参りに出かけた。この時、お団子を9個作り、墓前に供えた(写真19)。本来、このお団子は湯灌人が初七日まで毎日作り、取り替えてお供えする。お団子を乗せた半紙(力紙)は導師杖に結びつける。これはあの世に故人が昇りやすくするためとのこと。今回、O家では湯灌人に迷惑をかけないように、初日だけ一緒に墓参りに出かけ、それ以降はO家と親戚だけで行った。

昼食後、組へのお礼として冷凍エビ一箱を各世帯へ届けた。

<七日参り>

家族と店のおばちゃんで行った。お供え物は団子とシオサングである。

<初七日、百ヶ日、初月命日>

葬儀の時に繰り上げ法要した。

<新盆>

7月31日、盆棚をつくる。

8月1日、新盆見舞いに新盆見舞客が訪問し始める。その際、見舞客は新盆見舞いとフジ(諷

誦)も持参する。フジは施餓鬼の時に、お寺へ奉納されるもので、僧侶による諷誦文読誦後、名前が読み上げられる。僧侶から読み上げられる諷誦文は平安前期頃から、経典の読誦や願文、教化などの目的として仏事の際に唱えられた独特の様式を持った文章の総称であるため、僧侶によって文面が異なるという(顕本法華宗禹師寮, 2006)。

8月2日、庭に灯笼を新たに設置し、夕方になると明かりをつけた。盆棚にも灯笼を設置した(写真20)。

8月7日9時、親戚とO家で迎え火を行った。提灯を墓地へ持って行き、線香をあげた後、提灯のロウソクに火を灯して帰宅した。今回は毎年行っていた迎え火より早めにお迎えしたとのこと。その後、庭の灯笼の足元に草履、水を張った洗面器、灯笼の柄の途中にタオルを掛けた(写真21)。これは毎年行うものだが、O家では前回使っていたものが壊れたため、しばらく灯笼をたてず、K氏の新盆をきっかけに灯笼を新たに購入したとのこと。夜は灯笼に明かりを点す。

8月13日10時、再び、迎え火を行った。帰宅後、丸い団子を2つ作り、餡を添えて盆棚に供えた。15時、タナデンコ(棚題目講)が行われた。組の人たち7名が訪問し、全員がお線

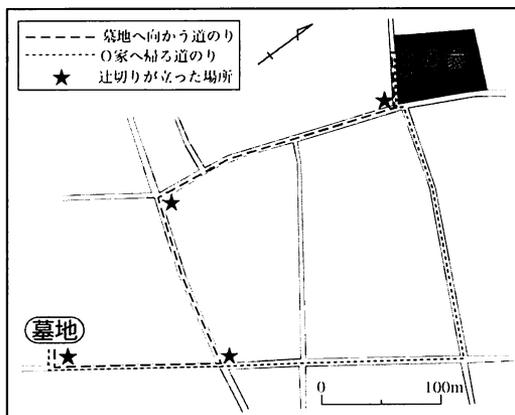


図1 会葬列が通った道と辻切りが立った位置行きと帰りの道が異なるのは、墓へ送った霊がついてこないようにする、目くらしのためである。



写真 19: 新たにお供えした団子 (写真右、左上が小さい団子で他は大きな団子). 古い団子 (写真左) は回収し、半紙は導師杖に縛りつける.

写真 20: 盆棚.

写真 21: 庭に設置した灯籠.

写真 22: 送り火の様子 (食事の後、家族と近所の親戚で墓地へ向かう).

写真 23: 湯灌人の出で立ち.

写真 24: 法菓子が入っていた入れ物を玄関に飾る.

香を上げた後、親族、親近者、組の人達で題目を3回唱えた。

15時20分から食事会が始まり、17時30分頃まで続いた。帰るときにお礼の品を渡した。その後、親戚とO家で夜中までお酒を飲んで食事した。

8月15日、昼に施餓鬼（セガキ）がお寺で行われ、終了後、O家にて食事会を行った。

同日20時15分に送り火が行われた（写真22）。帰りは違う道を通り、21時頃に帰宅した。通った道は埋葬の時に歩いた道と同じである（図1）。

<秋の彼岸>

特別なことは執り行わず、通常通りの墓地の清掃を行い、僧侶も通常の読経で済ませている。

【葬送儀礼の特徴】

葬儀の経過で記した葬送儀礼の特徴について以下に述べる。M氏からの聞き取りと、九十九里町小関に位置する顕本法華宗妙覚寺の住職にも聞き取り調査を行ったので、あわせて記す。

<臨終>

・ゼニバコ

葬儀で使う鉦が入っているので「カネバコ」とも言う（写真1）。鏡（ニョウ）、鉢、木鉦（モクショウ）などが収められている。

人が亡くなると家族がゼニバコを寺へ取りに行くことになる。これは葬式を執り行う順番を押さえるため、葬儀の日程を決める上で重要な行いである。

<仮通夜>

・真亀地域の組について

O家が位置する真亀地域には組制が残っている。

これは葬儀や結婚式、七五三のお祝い、屋根替え、溝ばらい（いわゆるドブ掃除）、回覧板

の回覧、病気見舞い、神社や公民館の清掃などを行う際に行動をともし、O家を含め隣接した7世帯が一つの組を成している。O家の組は最近、分家した世帯や引っ越してきた世帯が加わり、9世帯で組を成している。地域全体としても7～8世帯で一つの組を成しているようである。

妙覚寺の住職の話によると、仮通夜の晩に組の人達が集まることを「ちぎり」といい、葬儀の段取りや各世帯から男性と女性をどのような割り当てで出すのかを算段するという。M氏によると、真亀では特に呼び名は無いとのことだ。

・仮通夜について

通夜の前日に、親戚、組の人達、近親者で時を過ごし、故人を偲ぶための仮通夜が執り行われる。これは通夜、葬儀だけだと慌ただしく時が過ぎ、故人を偲ぶ時間があまりに少ないためだ。それは形式的な儀式ではなく、弔問者が普段着で訪ねて執り行われるところからも垣間見られる。題目講がおこなわれる。

・題目講

組の人達が仕切り、親族や近親者とともに題目を108つ数える。これを3回繰り返す（写真16）。

太鼓を叩くことを地元では「デンコ」と呼ぶ。太鼓を叩くのは組の人であれば男女を問わない。

葬儀が全て終了し、最後に太鼓を題目を叩きながら唱えるので、太鼓が聞こえると近所の人には葬儀が終わったと分かり安堵するとM氏は語る。

デンコは仮通夜、納骨終了後、新盆に行われる。ただし、仮通夜の時、太鼓は叩かない。

真亀ではかつて、毎月13日にお年寄りが集まり題目を唱える題目講はあったようだが、現在は執り行われていない。M氏によると、犬供養（安産祈願）も題目講としてかつては執り行

われていたようである。

・湯灌人

水行人ともいう。

現在、湯灌人は持ち回りで組の男ドンから2名選ばれる。彼らはサラシを服の上からたすき掛けにし、腰に巻いた様相で作業を行った。このサラシは通夜から埋葬が終わるまで身につけている(写真23)。妙覚寺の住職によると、腰だけ巻く場合もあるという。

現在の真亀地域での湯灌人の仕事は1) 通夜で会葬者が香炉を回す時の補助、2) 棺へ蓋をする最後の釘打ち、3) 火葬場への同行、4) 葬儀でコヨリを会葬者に渡す、5) 葬儀でお膳まわしの補助、6) 墓地への納骨、7) 墓地で会葬者がシオサンゴ(塩珊瑚米)をあげる補助、8) 七日参りの付き添いである。

<通夜>

・ホケ

「ホッケ」ともいう。店のおばちゃんによれば、故人の「取り上げの孫(真亀では「ソトマゴ」という)」または、結婚式で仲人をやってもらった人が準備するとのことだ。ホケが入っていた入れ物は葬儀中、玄関に飾っておく(写真24)。店のおばちゃんによると、九十九里町では海岸地域の家の方がホケの量が多く、玄関にたくさん葬儀の時に並んでいるという。

今回の葬儀では取り上げの孫2名、O家がホケを用意したが、本来ならば故人の家族であるO家は用意するものではない。

ホケは大福、すあま等の生菓子である。これらはお茶菓子として、通夜の最中、読経が一度終わったところで休憩の意味で会列者に缶のお茶と一緒に配られた。余ったホケは、組の人達や手伝った働き手が持って帰る。

取り上げの孫(ソトマゴ)とは、この地域に残る取り上げの風習によるものである。真亀地区周辺では子供が産まると、「取り上げの親

をたてる。取り上げの親とは育ての親のことで、捨て子は丈夫に育つという考えによるものである。

取り上げの親は信頼のおける親戚が選ばれる。「子」とは言わず「孫」と言うのが興味深い。男の子は生後35日、女の子は生後30日経つと、取り上げの親と実の両親とともに、近隣の神社の七社にお宮参りする。真亀地区では、須賀神社の天王様と子安様、水神社、オボスナサマ(昔はオボスナサマの敷地内に参拝する場所が3箇所あったが、建物が無くなったため、現在は1つの祠だけなのでまとめて参拝したことにしている)、浄泰寺である。その際、スギの葉を徳利に差した御神酒、赤飯一つまみを各お社へ奉納する。赤飯は1つの入れ物から半紙に小分けにし、余った赤飯は最後に参拝する浄泰寺へ献上する。

取り上げの親は七五三のお祝い、幼稚園の入学など、子どもの節目になるときに家族とともにお祝いをする。数えて七歳になると、産みの親に返す儀式を行う。真亀ではこれを「ヒモトキ」と呼び、その子を「ヒモトッコ」と呼ぶ。最近は簡素化されたが、O家では約25年前までは結婚式並みに大々的に式が執り行われた。

<葬儀、埋葬>

・僧侶の人数

葬儀で3人の僧侶が読経した。妙覚寺の住職によると、通常は3名で執り行いが、2名の時もあるようだ。

・ジャ(蛇)、天蓋

本葬儀で製作したジャや天蓋は色鮮やかな色彩だが(写真4、付録2)、九十九里町小関周辺では白色で地味な色合いのようだ。妙覚寺の住職によると、天蓋のまわりの角には色紙の輪ではなく、短冊を飾り「開仏知見」「示仏知見」「悟仏知見」「入仏知見」の文字を入れるという。

今の天蓋は葬儀業者が板で土台を製作してあ

り、紙を貼るだけであるが、昔は組の人が竹で天蓋の骨組みを作り、紙を貼り合わせた。

・導師旗

六道まわりの中心に男ドンが持つ道具。今回は1本のメダケに導師旗と四菩薩を付けたが、妙覚寺の住職によると、3本の竹をまとめたものを使用するようだ。

また、四菩薩は昔、4枚に分かれて付けていたが、最近は1枚にまとめられることが多く、2枚に分ける場合もあるようだ。

・辻切り

辻切りは墓地への通り道を示す道具で、悪霊から守るための結界の意味をなすと妙覚寺の住職は語る。

今は1本の長いメダケに短いメダケを付けて、1人が持っているが、約20年前頃までは長いメダケ2本を組み合わせ、男ドンが2人で持って、その中を列が通ったという。現在は手伝う男ドンの人数が減ってきたため、1人で言うことになったようだ。(写真12)。妙覚寺周辺の小関地域では未だにメダケを2本組み合わせた辻切りを用い、会葬列が通ると二人が慌てて次の曲がり角まで走るようだ。

・コヨリ

妙覚寺の住職の話では「そでまもり」という。悪魔が立ち寄らないよう、葬儀が始まるときに配るのが本来の風習とのことだ。

本葬儀では「妙一」と書かれているが(写真7)、妙覚寺の住職は「妙法第一」と書くという。

・六道まわり

今回は葬儀終了後、親族や会葬者は玄関から庭へ出た後、僧侶の指示の元、六道まわりを行う列の並び方の指示を受けた(表2)。僧侶も併せ、12名で六道まわりが始まるが、男ドンが導師旗を持ち、それを中心に右回りに3回半

表2 O家葬儀における六道まわりの参列者の並び順

順番	持ち物	故人との関係
1		僧侶
2	位牌	施主(夫)
3	御骨	長女の夫
4	写真	長女
5	導師杖	兄
6	御膳	次女
7	七本卒塔	ひ孫(長女の次女)
8	香炉	姉の長男
9	御膳台	姉の次男
10	団子	ひ孫(次女の長女)
11	卒塔婆	次女の夫
12	卒塔婆	近親者

歩いた。

妙覚寺の住職によると、家の中で六道まわりの並び方を決めて庭に出るのが本来のやり方とのことだった。妙覚寺で行う野辺送りの並び方は表3の通りである。妙覚寺では遺族に予め「野辺送り役課表」を渡し、決めておくとのことだ。本葬儀では役課表は無く、その場で僧侶が決めたので、順序や持ち手の関係が妙覚寺と異なると考えられる。

・導師杖

導師杖は、杖をたよりに死者が浄土へ行くし、杖をついていくための死者の道具を意味する。1mほどの竹に「釈迦有一導師」と記した札を貼り、墓地の地面にさしておく。

七日参りの時に毎日、お団子を作るが、前日のお団子に敷いた半紙をこの導師杖に結びつける。こうすることで浄土へ詣でやすくなるという。

妙覚寺の住職によると、昔、墓地に納骨した後、予め切っておいた芝を3枚、地面に敷いて導師杖をさした。土葬の時の習慣が残っていたが、今ではやらなくなったという。

表3 九十九里町小関地区及び真亀地区における六道まわりの参列者の並び順の比較

順番	小関地域		真亀地域（本葬儀）	
	持ち物	故人との関係	持ち物	故人との関係
1		僧侶		僧侶
2	提灯	親戚代表	位牌	施主（夫）
3	位牌	施主	御骨	長女の夫
4	御骨	故人の親戚（近い順）	写真	長女
5	写真	故人の親戚（近い順）	導師杖	兄
6	香炉	故人の親戚（近い順）	御膳	次女
7	導師杖	孫 子供（孫が多い）	七本卒塔	ひ孫（長女の次女）
8	塔婆	故人の親戚（近い順）	香炉	姉の長男
9	燭台	故人の親戚（近い順）	御膳台	姉の次男
10	御膳	女性（施主の妻が多い）	団子	ひ孫（次女の長女）
11	団子	女性	卒塔婆	次女の夫
12	御膳台	女性	卒塔婆	近親者

・シオサンゴ（塩珊瑚米）

塩珊瑚米は塩と精米した米を混ぜたもので、野辺送りをする前に予め男ドンが準備しておく。納骨後、墓地で会葬者は線香をあげる時に一つまみ播く。湯灌人は塩珊瑚米が入った半紙を手を持ち介添えする。妙覚寺の住職によると、昔は精米した綺麗な米を生前は食べられなかったため、せめて亡くなったときは食べさせてやりたいという思いからできた風習だという。精米した米の光り方が、珊瑚のような美しい白さであることから珊瑚米と呼ばれる。

・線香

今回、男ドンは線香3本を束にした。妙覚寺の住職によると1本でも構わないようである。

・組へのお礼

葬儀が全て終わった後、お礼の会が組の人達に催される。それが終わり、帰り際にお礼として砂糖を4キロ分（1キロの砂糖袋4つ）が渡された。

妙覚寺の住職によると、これは本来、四九忌

日の供養の品であるとのことだ。昔、組の人は無報酬で働くか、渡してもせいぜい千円ぐらいとのことだ。ただし、故人の兄弟が多い場合、私財もあると額も上がったという。

これに相当するお礼として、O家では葬儀の翌日に冷凍エビ1箱を各世帯に渡した。

<葬儀以降>

・故人が着た服や毛布を洗濯して北向きに干す

故人が使用した毛布と服を洗濯し濡れた状態で北向きの場所に乾くまで干す風習がある（写真18）。店のおばちゃんの指示で故人の長女の長女（孫）が行った。かつては故人が着ていた服や毛布を家族が2人で手洗いしていたため、厚手物は1週間くらい干していたようだ。これは昔からの言い伝えだから理由は分からない。

・四九日までの墓参り

親族と湯灌人が初七日まで毎日、団子とシオサンゴを墓に供える風習があるが、O家では埋葬後の翌日だけ湯灌人と出かけ、その後は家族によって行った。これは湯灌人に手間をかけさ

せない配慮からである。団子の数は、亡くなった年齢の数だけ作るが、10個単位で大きめに作り、端数は小さめに作る。K氏は数えて81歳なので、大きな団子を8つと小さな団子を1つ作り供えた（写真19）。

妙覚寺の住職によると、僧侶も初七日まで毎日行くこともあるという。遺族の希望によっては、七日参りに僧侶が行くときもある。

なお、O家では七日参りにはO家と店のおぼちゃんが出かけ、団子と塩珊瑚米を墓に供えた。

・繰り出し位牌

この家に他所から来た人は亡くなった後、個別の位牌として仏壇には飾られず、繰り出し位牌の中に納められる。K氏は東金市大沼から嫁いだったので、繰り越し位牌に納められることになる。繰り出し位牌は四九日を過ぎた後に作られ、位牌の裏には水行人（湯灌人）の名前、故人の俗名や享年が書かれてある。葬儀で用いた位牌はお寺へ渡したり、お墓に供えられる。

・両墓制について

今回、葬儀で埋葬した墓とは別に、檀家になっている浄泰寺にO家の墓がある。横27cm、縦28cm、高さ68cmの墓石には天保七丙申年の文字が刻まれている。骨は埋葬していないとの伝承があるところから、両墓制の詣り墓であったと考えられる。

O家は浄泰寺にある墓へ春と秋の彼岸、お盆、暮れの4回、清掃に出かける。清掃時、線香はあげる時があれば、あげない時もあるという。一方、納骨施設があり、かつては遺体を埋めた墓地（埋め墓）の方には、これらの時期以外に、月命日にも線香をあげている。O家の人たちにとっては浄泰寺の墓よりも、K氏や記憶にある親族の遺骨が埋葬されている墓の方が重要視されている。

<新盆>

・盆飾り

盆飾りは毎年、O家の人たちが組み立て、組の人達は参加しない。新盆だからといって、特別なことは行わない。

盆飾りは、木枠を組み合わせた後、2段の棚を組む。組んだ木枠の上の方に縄を張り、縄にホオズキ、ピーマン、ナス、苗をヒモで付ける。

初盆では、毎年飾る盆飾りに灯笼や花が置かれるくらいで、派手さはあまりない（写真20）。

・盆棚の灯笼

新盆で盆棚に飾る室内の灯笼は親戚が購入する。庭に設置した灯笼はO家が購入した。

・迎え火

8月7日と8月13日の2回、迎え火が行われた。これは、近所にも不幸があり、8月6日にその家が迎え火を行ったので、それに合わせたためだ。通常は13日に行い、新盆でも迎え火を行う。

・タナデンコ

新盆で行うデンコをタナデンコ（棚題目講）と言う。通常通り、組の人達で題目を唱える。その後、組の人たちと食事会を行う。

・新盆に供えるお膳

新盆に供えるお膳は同じものを3つ用意する。そのうち2つは盆棚の上段に、残る1つは棚の下へ隠すように供える。下に置いたお膳は無縁仏への供養だとM氏は語る。昔は6つ以上用意して供えたようだが、簡素化して3つになったようだ。

供えたものは以下の通りで、これらをお膳にそえたものを3つ用意した。

8月13日の迎え火が終わると、丸いお団子、餡、お新香を皿に載せてお供えをする。

8月14日の朝はO家の人たちと同じ食事、昼はうどん、夜は丸いおにぎり（「みたま」という）にオガラ（または箸）をさしたものを供える。

8月15日の朝は供えない。昼はO家の人たちと同じ食事を供える。

8月15日の朝にお膳を出さないのは、14日の夜に先祖が親戚まわりをしてお腹が満たされているので供える必要がないからだM氏は語った。

店のおばちゃんによると8月15日は昼も食事を供えないという。14日の夜に出かけた故人が送り火をする直前まで出かけているからとのことだ。

また、お膳の数は各家で供養したい仏の数によるという。ちなみに、店のおばちゃんの家のお盆棚の上段にお膳を3つ供えている。

【失われた風習】

O家のM氏や妙覚寺の住職によると、葬儀の様相は昔に比べて様変わりしてきたという。以下、聞き取った情報を列挙する。

・告げ人について

電話網が発達する以前は、通夜や葬儀の日程を告げる「告げ人」を組の人が担っていた。

葬儀の日程が決まると、組の男ドンが2人1組になって千葉県内の親戚へ自転車で知らせに出かけた。県外については電報で対応したようだ。M氏も15歳頃、茨城県の鹿島まで自転車で知らせに行ったという。この頃は、近隣の市町村で結婚相手と出会っているため、親戚も比較的近くに住んでいる。よって、自転車で知らせることでほとんどの親族に知らせられたという。また、告げ人にお礼のお金を渡したようだ。

・葬儀の帳場

妙覚寺の住職によると、葬儀の帳場は組の人が昔は行い、故人の関係者は一切関わらなかつ

たようだ。お布施の交渉も組の者が行った。葬儀全体の運営にも関わるため、その力量が試されたようだ。

・湯灌人について

昔は死者の身体を洗ったり、お墓に穴を掘って棺桶を埋める役目であったが、土葬から火葬になった現在では役割が変わってきた。

九十九里町小関の妙覚寺の住職によれば、住職の親族が最後に土葬が行われたのは昭和39年だったという。店のおばちゃんによると、昭和54年に寝棺による土葬が行われたという。

また、M氏によると、通夜の夜から湯灌人2名は墓地で穴を掘った（地域によっては穴掘りを組の別な人が担っていた）。この地域は地下水位が高いため、地面を60センチほど掘ると水がしみ出してくる。あと1メートルは棺を埋めるのに掘らねばならないが、水をくみ出しながらの作業だった。これは徹夜の作業だったため、酒とつまみを食しながら掘ったようだ。埋葬時は穴に水が溜まってしまい、棺を入れると浮いてしまうため、湯灌人が棺に乗りながら埋めた。

棺は棒に縄をかけて運ぶが、縄は組の人が作り、埋葬時には縄ごと埋めた。

・棺について

妙覚寺の住職が墓石の業者に問い合わせたところによると、大正から昭和初期にかけて、甕に遺体を入れて埋葬した時期があるという。M氏によると、甕の底が平らになるように木の板で作った台を敷き、スゲ笠をかぶり着物を着た遺体を膝を抱えるように座らせて入れた。この中にお茶の葉を目一杯いれて蓋をして、松ヤニで甕と蓋を接着し、外気に触れないように密封した。お茶の葉が無いときは、粉殻を代わりに入れたという。

甕が手に入らなくなってからは木製の棺に変わり、棺の中にお茶の葉は入れなくなった。

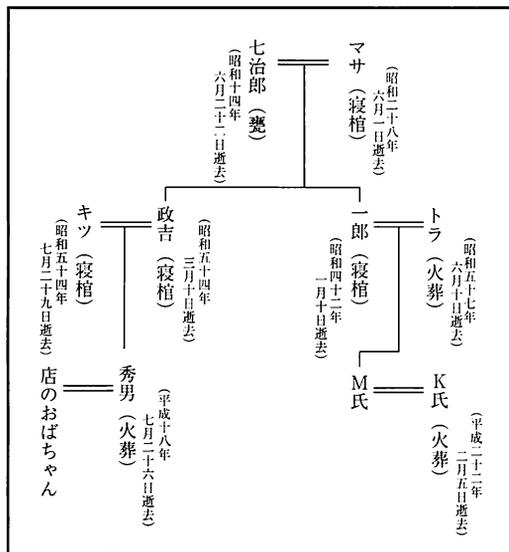


図2 O家および親族の埋葬形態

土葬時の棺の形態は、真亀地区では昭和41年頃には寝棺ばかりだったというが、九十九里町小関の妙覚寺の住職の話では、小関地域では蓋が四角の座棺が多いという。隣接する地域ではあるが、棺の形態が違う事は興味深い。

なお、M氏への聞き取りによる、O家の埋葬形態を図2に示す。

・天蓋について

今日、ジャに取り付ける天蓋はおおよそ50センチ四方の大きさだが、土葬だった頃は、遺体の膝を曲げて入れる「立て棺（座棺）」の蓋の上を被う1メートル四方ぐらいの大きさだったという。

台車に棺を載せ墓地へ向かう時、今と同じようにジャに取り付けた天蓋が棺の上を被うようにして移動した。

・喪主のワラジについて

墓地へ向かう際、喪主は男ドンが作ったワラジを履いた。そのワラジはお墓で燃やした。

本葬儀では、葬儀業者が用意したワラジ2足を玄関から出るときに、K氏の長女夫婦が履き、

墓地へ入る最後の曲がり角で脱いで焼却する予定であったが、組の男ドンが渡すのを失念したため、執り行われなかった。

・妊婦について

妊婦が葬式に参列するときは、鏡をお腹に入れて行きなさいと店のおばちゃんは語る。障害を持つ子供（口が裂けた「ミツクチ」）が産まれるという言い伝えとのこと。妙覚寺の住職はこの言い伝えは認識していない。

【おわりに】

土葬から火葬、納骨施設のある墓地の普及、斎場による葬儀が増えるなど葬送儀礼も大きく変化してきている。真亀地区でも最近ではジャなどの葬儀に使われる道具を作らなくなっているという。作り方などは忘れられてきている。今回は故人の希望により伝統的な葬儀を執り行う事となり、作り方などを詳細に記録することができた。

失われつつある葬送儀礼を後の世代のために記録することで、故人への供養としたい。

最後に、本葬儀の記録を快諾してくださったO家の皆様、組の皆様、九十九里町小関地域周辺の葬儀についてご教示いただいた妙覚寺住職・河野時巧（じぎょう）氏に感謝いたします。

参考文献

顕本法華宗禹師寮（2006）顕本法華宗諷誦文解説のしおり．顕本法華宗禹師寮発行．

付録1 O家の葬儀記録

		全体	O家と店のおばちゃん
2010.2.5 (金)	19:37 21:30 頃 ～ 0:00 頃	K氏、病院にて逝去。 ご遺体、病院から自宅に到着。葬儀業者が搬送。 布団の上にカミソリを置く。 近所の人々訪ねる。	仏壇と神棚に半紙で目隠しをする。 ゼニバコ(カネバコ)を浄泰寺へ取りに行く。 組長へK氏が亡くなった旨を伝えに行く。 一晩中、線香守。 線香守しながら仮通夜から葬儀にかけた献立を精算し、 買い出しリスト作成。
仮通夜 2010.2.6 (土)	7:00 頃～ 8:00 頃 10:00 13:00 15:00 ～ 17:00 ～ 18:00 ～ 18:30 ～ 22:00 頃	近所の方々、弔問に来る。 葬儀業者訪問。遺体を棺に入れ、祭壇の設置。 O家買い出し 花輪など続々到着 僧侶来訪し、葬式の打合せ。質問票に記載させる。 喪主挨拶作成 組の話し合い 仮通夜(普段着) 男ドンに酒と料理を振る舞う 男ドンお開き	大掃除開始。 買い出しリストに沿って買い出し開始。 香典返し作成開始。 長女の夫のみ列席。M氏は弔問客対応。他は台所 一晩中、線香守
通夜 2010.2.7 (日)	8:00 ～ 10:00 10:00 ～ ～ 12:00 13:00 14:00 頃 15:00 頃 16:40 17:00 頃 17:55 ～ 18:10 18:50 19:10 ～ 23:00 頃	通夜の食事の下ごしらえ 通夜中に渡すお茶菓子準備 会場設営 親族で昼食 男ドン6名集合 香典返し袋詰め 女ドン5名集合。調理開始。近親者女性1名も手伝う。 男ドン食事 弔問客が訪問し始める 通夜開始 お茶菓子配布。 お通夜終了。食事の準備。 食事開始 男ドン帰宅 徹夜で線香守する人も	通夜の食事の下ごしらえ開始。その他は大掃除。 店のおばちゃん、お茶菓子準備開始。 会場設営(80人分)。 香典返し袋詰め作業 女性は喪服に着替え始める 男性も喪服に着替え始める 次女の夫受付
葬儀 2010.2.8 (月)	6:00 7:00 7:35 8:15 8:30 過ぎ 10:15 10:40 12:00 ～ 12:55 ～ 14:00 14:15 14:25 14:45 15:00 15:05 15:15 15:40 17:00 17:15 ～	男ドン7名、女ドン6名集合。近親者女性1名も集合 僧侶訪問。読経。 出棺 火葬場に到着後、すぐに火葬。 骨を骨箱へ 帰宅。男ドンがお清め手伝い。 到着後、昼食 御前様3名すでに訪問し、卒塔婆や天蓋に筆で書き込む。 終了後、昼食、別テーブルを希望。 受付 葬儀開始 葬儀終了 納骨の儀式開始 墓地到着 納骨式終了。行きと違う道を通ってO家に戻る。 帰宅。男ドンがお清め手伝い。 題目講(デンコ)(組、親族など24名)。題目を3回唱える。 題目講終了。組へのお礼食事会の準備。 組へのお礼会開始 組帰宅 親族、祭壇前で慰労会	喪服に着替える 近い親族は後ろの部屋で食事。 題目講(デンコ) 親戚は末部屋にてお茶してくつろぐ。 M氏、長女夫婦が組と食事。

人	男ドン	女ドン
相談。	組長が組の人たちに連絡。	
組の人で話し合い。今後の段取りの相談。昔ながらの葬儀を執り行うことに。 新で食事。	別部屋にて食事（飲酒）	葬儀の段取り後、帰宅。
	<p>ジャ、導師旗、辻切り、線香束、コヨリ、香炉の製作開始。</p> <p>倉庫で食事（酒なし） 受付係2名 司会進行役：湯灌人2名 香を焚くときも湯灌人が世話</p> <p>別部屋にて食事（飲酒） 23時帰宅 店のおばちゃんの長男だけ徹夜</p>	<p>料理差入れ。</p> <p>1名、早めに手伝う。 5名集合。メニューに沿って調理開始。</p> <p>お茶菓子配布 会場準備 台所で食事（酒なし）</p>
	<p>7名集合。ジャを仕上げる。</p> <p>2名同行</p> <p>お清め手伝い1名</p> <p>倉庫で食事（酒なし）。筆書きした導師旗、 四菩薩、辻切りを取り付ける 受付 司会進行役2名 湯灌人：読経中にコヨリを渡す、お膳をまわす世話 男ドン：導師旗、辻切り、先頭でジャを持つ 湯灌人は納骨、塩珊瑚米の手伝い。他はジャなどを焼却。</p> <p>待っていた男ドンがお清め手伝い 題目講（デンコ） 片付け 食事（飲酒）</p>	<p>6名集合。調理開始。</p> <p>昼食支度</p> <p>台所で食事（酒なし）</p> <p>題目講（デンコ） 食事会の準備 食事（飲酒）</p>

付録2

ジャの作成方法

伝統的なジャの作成方法を知る人は本地区ではもはや存命しない。しかし、そのジャの作り方を見ていた亡きK氏の夫M氏の記憶をたよりに、組の男ドンが今回製作することとなった。従って、飾り付けなどは男ドンの自由な発想のもとで行われた。以下に手順を記す。

【準備する材料】

マダケ（真竹）1本（長さは3m程度、頭部用）、わら、半紙、ウメの枝（ツノ用）、ビワの葉2枚（耳用）、色紙（葬儀業者のジャの天蓋セットに付属）

【手順】

1. ジャの頭部の作成

- ・青竹の先端10センチほどに切り込みを少し入れる（ジャの頭の落下防止のため）。
- ・青竹の周りにわらを巻き、切り込み部と青竹先端部をひもで固定する。今回はわらの2/5程度を巻いた（写真1）。
- ・青竹の先でわらを折り返し、2箇所をビニールひも（以下、ひも）で固定する（写真2）。
- ・半紙で先端を覆い、ひもで固定する（写真3）。
- ・1辺に約2センチ切り込みをたくさん入れた色紙を周りから巻き付ける（写真4）。
- ・色の違う色紙を同様に切り込みを入れて5枚、ずらしながら取り付けてひもで固定する（写真5）。今回はジャの先端から首に向かって青色、黄色、紫色、赤色、緑色の順で色紙が巻かれたが、色や切れ込みのやり方に決まりはなく、男ドンの好みで行われた。

2. ジャの耳の作成

- ・ビワの葉の柄に竹を割いて作った串（以下、

竹串）（長さ約5センチ）をひもで固定する（写真6）。

- ・細長い色紙をひもの周りに糊付けして目隠しをする。これを2つ作る（写真7）。

3. ジャの目玉の作成

- ・約10センチの竹串に幅5センチほどの半紙を巻きながら糊付けし、ピンポン玉ぐらゐのジャの目を2つ作る（写真8）。

4. ジャのあごの作成

- ・約50センチの竹串を曲げて、途中をひもで固定する。竹串の長さはジャの頭部にあてながら、目分量で決めた。固定する幅もジャの頭部と合わせながら調整して決めた。ひもの固定箇所に予め切り込みを入れておくとずれない等、随所に工夫が見られた（写真9）。

- ・半紙を切り取り、上面と下面を糊付けする（写真10）。

- ・この周囲に銀の色紙を糊付けして切り込みを入れて歯を作る。歯の形は男ドンの好みで作られた。さらに、あごの内側に赤い色紙を貼って迫力を演出した（写真11）。これで下あごの完成である。この要領で上あごを作成し、あごの内側には金色の色紙を貼った。

5. ジャの頭部の仕上げ

- ・上あごと下あごをひもで頭部に固定する（写真12）。
- ・ジャの目を頭部に差し込んで、黒目を黒マジックで塗る。また、口の中に赤色の舌を取り付けた（写真13）。
- ・ジャの両あごを固定したひもの周りに色紙を巻いて、屋号をマジックで書く。今回は金色の色紙を長めに巻き、あごひげのように仕立てた。耳とツノになるウメの枝を2本つけて形を整えて、ジャの頭部の完成である（写真14）。

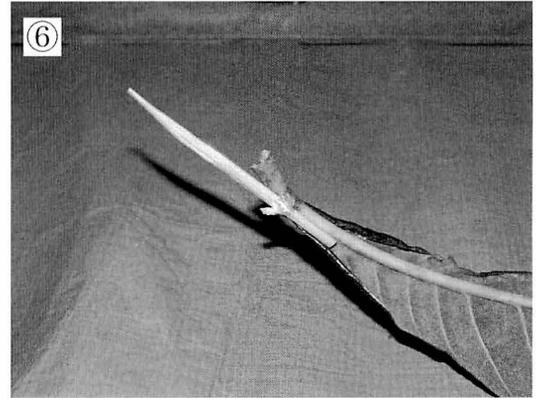
6. 天蓋の作成

- ・天蓋を作成するセットが葬儀業者で用意し

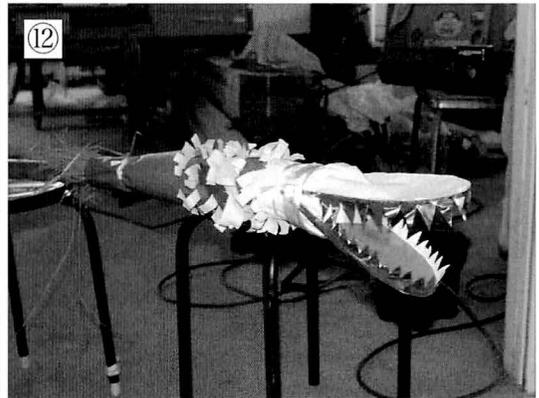
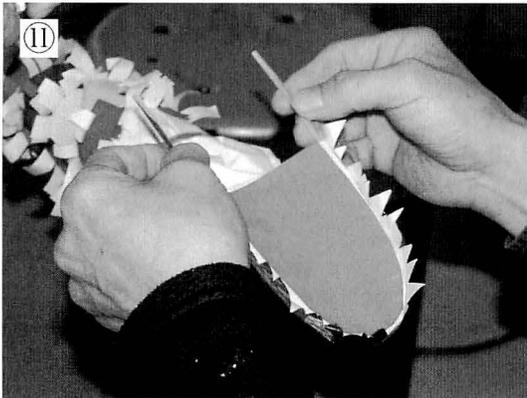
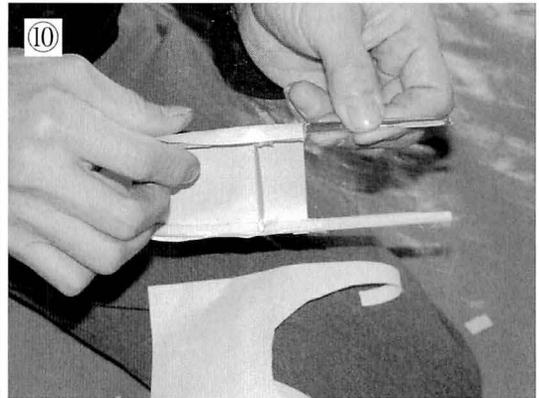
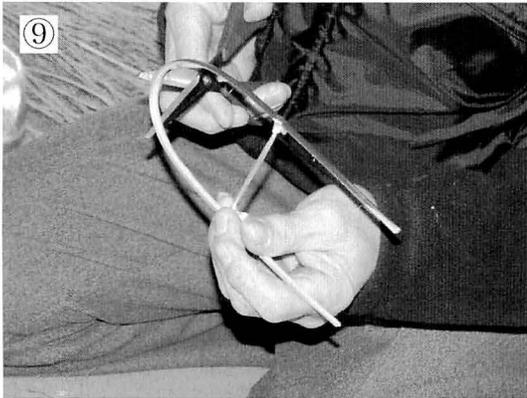
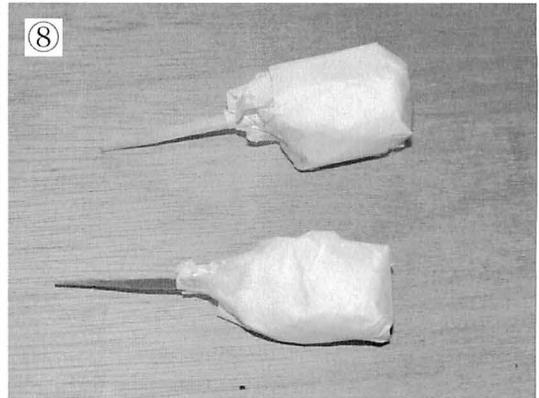
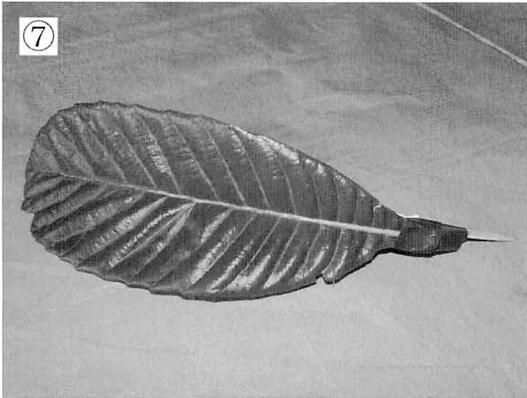
である（写真 15）。

- ・木製の天蓋の土台に付属の色紙を装飾する。笠の対面に屋号と印を貼る（写真 16）。屋号を貼り付けた面は黄色、印を貼り付けた面は緑色の色紙が土台に貼ってある。笠の四隅にある、上方へ張り出した針金には黄色、赤色、青色、緑色の色紙を巻き付けた。その針金から垂れ下がる飾りは、紫色と緑色の色紙を輪にしたものを交互に取り付け、最下部を金色または銀色の輪にして対面にそれぞれを配置した。これらの装飾は男ドンの好みで行われた。
- ・天蓋をジャの本体に取り付けて完成である。翌日の葬儀が始まる前に僧侶が天蓋の屋根の四面に「供養」、「皆応」、「一切」、「天人」と筆で書き込んだ（写真 17）。

九十九里町真亀の葬送儀礼



- 写真1：青竹の周りにわらを巻き、切り込み部と青竹先端部をひもで固定する。
写真2：青竹の先でわらを折り返し、2箇所をビニールひも（以下、ひも）で固定する。
写真3：半紙で先端を覆い、ひもで固定する。
写真4：1辺に約2センチ切り込みをたくさん入れた色紙を周りから巻き付ける。
写真5：色の違う色紙をずらしながら取り付けてひもで固定する。
写真6：ビワの葉の柄に竹を割いて作った串（長さ約5センチ）をひもで固定する。



- 写真 7：細長い色紙をひもの周りに糊付けして目隠しをする。これを2つ作る。
写真 8：竹串に半紙を巻きながら糊付けし、ピンポン玉ぐらいのジャの目を2つ作る。
写真 9：約50センチの竹串を曲げて、途中をひもで固定してあごを作る。
写真 10：半紙を切り取り、上面と下面を糊付けする。
写真 11：あごの周囲に銀の色紙を糊付けして切り込みを入れて歯を作る。
写真 12：上あごと下あごをひもで頭部に固定する。

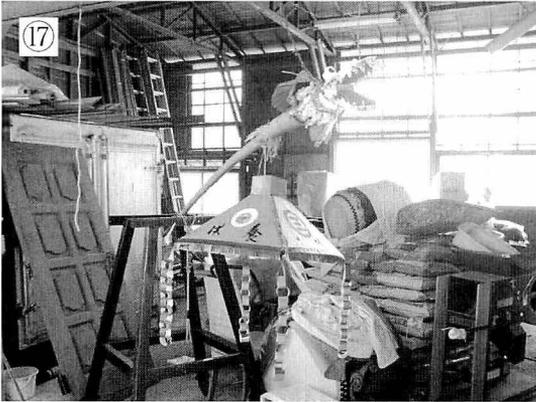
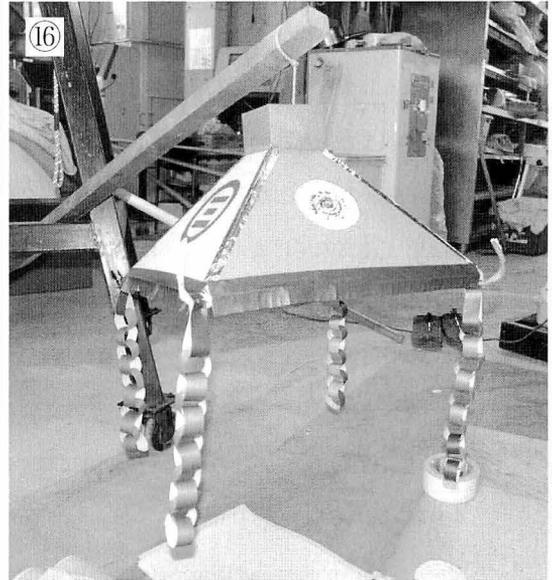
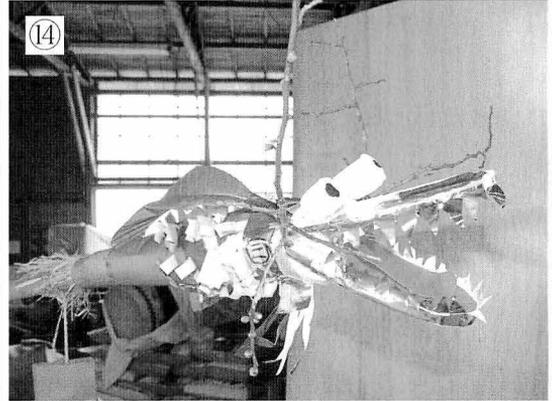
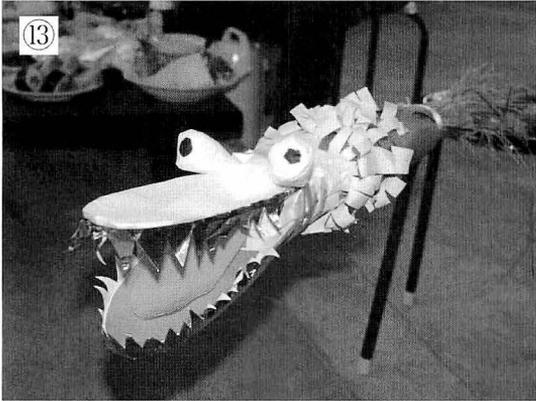


写真 13：ジャの目を頭部に差し込んで、黒目を黒マジックで塗る。
写真 14：ジャの両あごを固定したひもの周りに色紙を巻いて、屋号をマジックで書く。耳とツノになるウメの枝を2本つけて形を整えて、ジャの頭部の完成である。
写真 15：天蓋を作成するセットが葬儀業者で用意してある。
写真 16：木製の天蓋の土台を付属の色紙で装飾する。笠の対面に屋号と印を貼る。
写真 17：天蓋をジャの本体に取り付けて完成。